



～ 夢ひとすじに ～
宮原中だより

自ら学び 心豊かに たくましく

平成 27 年度 第 5 号
平成 27 年 7 月 17 日 (金) 発行
さいたま市立宮原中学校
メールアドレス
miyahara-j@saitama-city.ed.jp
ホームページアドレス
<http://miyahara-j.saitama-city.ed.jp/>

「通 信 簿」

校長 やました せいじ
山下 誠二

1 学期も本日で終わり、いよいよ夏休みを迎えます。“夏”と聞くと最近、蚊帳を見かけなくなりました。保護者の方も蚊帳を吊った経験のある方は少ないかもしれません。昔は網戸がなかったので、蚊帳を吊り、その中で蚊に刺されないようにして寝てました。風が通りにくいので、とても暑かった記憶があります。

私の夏休みを思い出してみると、小学生の時、父の実家に泊まりに行き、従兄弟や近所の子どもたちと朝から夕方までターザンの真似をしたり、川で釣りをしたりして遊んでました。日焼けして真っ黒になったのに、ゴムぞうり（当時はビーチサンダルとは呼んでいませんでした）の鼻緒のところだけ真っ白だったことを思い出します。生徒の皆さんには、夏休みが終わった時に学習や部活動、そして遊びにおいても「自分はこれだけのことができた。思い出に残る夏休みが過ごせた。」という自信が持てるような生活を送ってほしいと思います。そしてその自信を9月からの学校生活に生かしてほしいと願っています。

さて、昭和の大女優といわれた沢村貞子さんの著書『老いの楽しみ』の中に、こんな話が書かれています。

小学校2年生の時の通信簿が「オール5」で、嬉しくて嬉しくて、急いで家に帰り、台所で煮物をしていられるお母さんに見せ、得意満面に「先生に 誉められたの。私は特別によくできるって」と言ったのに、お母さんは、「へえ、そうかい」と言っただけで、振り向いてもくれません。少し悔しくなり思わず、「できない子だって大勢いるのよ。左官屋の初っちゃんなんか、算術ができなくて先生にうんと叱られて…」と言いかけた途端に、お母さんは振り向いて、「つまらないこと、お言いでないよ。人間、勉強さえできれば、それでいいってわけじゃないだろう。初っちゃんは、算術は下手かもしれないけど、小さい弟たちの面倒はようみるし、ご飯の支度だって、お前よりずっと上手だよ。人それぞれ、みな、どこかいいところがあるんだからね。先生にちょっと褒められたくらいで、特別だなんて、いい気になるんじゃないよ。みっともない」と、お母さんは本気で叱りました。急に恥ずかしくなって、握りしめていた通信簿を、そっと背中に隠しました。「特別という言葉が嫌いになったのはあの時からのような気がします。たぶん、母親は私がうぬぼれかけていて、差別的な心が芽生え始めてきているのを心配して、あえてこんなことを言ったのではないかと強く思います。」

と回想されています。自分の子が、オール5の通信簿を持ち帰ったら、親だったら嬉しいに決まっています。しかし、貞子のお母さんは、差別的な心が芽生え始めてきていることに気づき、それを指摘するチャンスをうかがっていたようです。そしてその指摘がオール5を褒めるより優先すべきことと考え、「…いい気になるんじゃないよ。みっともない。」という言葉になったのだと思います。私たち大人は、子供たちが人として

成長し、社会に出た時に困らないようにしてあげることが仕事と考えます。何を大切に子供たちを育てるか、そのことによりその子の価値観を大きく左右してしまうのかもしれないと感じさせられる一冊でした。



